

## 第6回「『論語』を読む楽しさ（二）」

\*\*\*

訓読の違いについて。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第6回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は『論語』を読む楽しさ、第二回です。

さっそく読みましょう。最初のことばです。

「子曰く、<sup>しいわ</sup>学<sup>まな</sup>びて<sup>つね</sup>時に<sup>これ</sup>之<sup>なら</sup>を<sup>またよるこ</sup>習<sup>えつ</sup>う。亦<sup>ともえんほうよ</sup>説<sup>き</sup>（悦）ばし<sup>あ</sup>からずや。朋<sup>ともえんほうよ</sup>遠<sup>き</sup>方<sup>あ</sup>自<sup>き</sup>り来<sup>あ</sup>たる有<sup>あ</sup>り。

亦<sup>またたの</sup>樂<sup>またたの</sup>しからずや。人<sup>ひと</sup>知<sup>し</sup>らずして<sup>いか</sup>慍<sup>またくんし</sup>らず。亦<sup>またくんし</sup>君子<sup>またくんし</sup>ならずや」（学而第一）

これは『論語』の最初の文です。

それだけに、なおさら有名な文として、人々に良く読まれています。

さて、『論語』を読む楽しさはどこにあるかという、このような名文を読むこともさることながら、いろいろな解釈があるということです。

なにしろ遠い昔のことばですから、どういう意味で孔子が言ったのか、あるいは前後の事情とか、それはわからない場合が多い。

残った文だけで考えるので、いろいろな解釈が可能になってきます。

そこで今回は、冒頭の有名な文章を例にとって、様々な解釈についてお話しします。

#### 【読み方・解釈の違い】

この句の場合、問題点がどこにあるかという、この「有」という字、その次の「朋」という字、この二つが問題になります。

C	B	A
有	有	有
朋	レ 朋、	下 朋
二 自	二 自	二 自
一 遠	一 遠	一 遠
一 方	一 方	一 方
来。	来。	上 来。

順番に考えましょう。まず、最初の A の文章。

最初に「有」という字が出てきます。ふつう「有」は強めているときに使われます。

何か有る、ということを強調する場合、わざわざ「有」を置きます。

では、何を強調しているか、ここで解釈が分かれてきます。

「有」が次の字から以下の文全部にかかっているという解釈があります。それがAです。

つまり、「有るぞ」、何があるかという、「友達が遠くからやってきたぞ」という全体を指します。友達が遠くからやってきたことを強めて言ったということです。ごく自然ですね。

ところが、この解釈だけではありません。

この「有」は、すぐ下の「朋」という字にだけかかっているという解釈もあります。

それがBです。すると、二つの文に分かれます。

「朋有り」、「遠方自り来たる」。Aは「朋が遠方自り来たる」を強めていますが、Bは「朋」に力点が置かれています。これは孔子の気持ちを表しているとも言えます。

なぜなら、今と違って西暦前六百年前後、友人が訪ねてくるのは、野を越え山を越え、大変でした。「友達が来た」という喜びの気持ちを表している。これがB。「朋有り。おお、来たか！こんなに遠くまでなァ」という解釈です。

ですから、驚きという意味からすると、AよりもBのほうが、何か心がこもっているという感じがあります。

Aの方ももちろん、友達が来てくれたことを強調していますが、友が来てくれた全体を強めての「有り」ですね。「朋が遠くからやってきた、あァ」。

Bは「有」を「朋」だけにかけるという考え方。「おお、お前か！ 遠いところからよく来たなァ」実感があるように思います。

AやBの読み方です。Aは「朋、遠方自り来たる有り」、Bは「朋有り、遠方自り来たる」

これは読む人の気持ち、感覚で決まります。どちらが正しいということはありませんが、感じが違うことを心に留めておくといいと思います。

もう一つ、Cを紹介します。これはなかなかおもしろい解釈です。

「朋」という字は、元来「貝」がふたつ並んでいる字でした。

この貝という字が崩れて、「朋」字になったという、ある独特の解釈があります。

貝は古代社会ではお金の代わりをしていた時代がありました。とすると、「有朋」は、貝をたくさん持っている人のこと、お金持ちです。

金持ちの友人が遠くから来てくれたなあ、うれしいじゃないか。

そりゃ、金持ちが来てくれた方がうれしいですね。こういう独特な解釈もあります。

では続けて次の文章にいきましょう。

これも解釈がいくつかあるところですよ。

それは、最後の「人知らずして慍らず。亦君子ならずや」です。

この「知らずして」という意味、普通の解釈は次の通りです。

孔子は不遇でした。孔子の才能や優れたところを他人は認めない。大抵の人はそこで不満を覚えます。ところが、孔子はそれを自ら戒めていたようです。

人、つまり他人が自分の価値を知らない、認めないからといって、腹を立てたりしないんだ、と。

普通はこう解釈されています。事実そうであつたらうと思います。孔子は不遇でした。

ところが、全く違う解釈が後に出てきます。

それは何かというと、孔子は教員であったことから、「教えても、その人（弟子）が理解できないからといって、腹を立てない」と。

このように教員としての心構えを言ったことばである。これも有力な解釈であります。

わずか「人知らずして」ということばでも解釈が分かります。

『論語』は、短い文であるだけに、様々な解釈が行われてきました。

そのような面白さもあります。

次の例です。

「<sup>うまや</sup>厩<sup>や</sup>焚<sup>け</sup>たり。<sup>しちょう</sup>子<sup>しりぞ</sup>朝<sup>より</sup>退<sup>く</sup>。曰<sup>く</sup>、<sup>い</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>きず</sup>傷<sup>つ</sup>けたるか、と。<sup>うま</sup>馬<sup>と</sup>を<sup>と</sup>問<sup>わ</sup>ざりき」

(郷党第十)

「子」と「朝」との間は、少し間をあけて読むといいでしょう。

「厩焚けたり」当時の人は、馬車に乗って通勤しましたので、馬がおります。その馬小屋、厩が火事になりました。大騒動だったと思います。

「子」孔子です。「朝」は政を行っているところ、政庁。孔子は勤務先の政庁から帰ってきました。馬小屋が焼けたことを聞いて、「誰か怪我をしなかったか」と訊ねました。

安否を聞いた後、それ以上は何も聞かなかった。馬は大丈夫だったのかとは聞かなかったという話です。これは普通の解釈です。つまり孔子は火事があっても、人間のことを中心に考えて、馬の安否など問題にしなかったという解釈です。

ところが、昔から全く違う解釈があります。

AとBとを見てください。

B	A
傷人乎不問馬。	傷人乎。不問馬。

ご覧になっておわかりのように、Bの文は「不」という否定形が、上の句に付いています。

この「不」は、否定の「否」と同じ意味という解釈があります。これは「であるのかそうでないのか」という意味です。例として熟語を三つほど並べました。

<sup>あんび</sup>「安否」は安全かどうか、大丈夫かどうか。

<sup>さんび</sup>「賛否」は賛成か反対か。

「<sup>とうひ</sup>当否」はそれが正しいのか正しくないのか。

今日でも普通に使うことばです。

「安否」は安きか否かということです。「賛否」も賛するか否か、「当否」当たっているかそうでないかという意味。「否」を「不」という文字で表すのはごく普通です。「不」を「否」何々するか否やと解釈しますと、このBの文はこうなります。「人を傷つけしや否や」人を怪我させたのか、そうでないのかと問うた。そういう解釈も可能は可能ですね。「人間は大丈夫だったか、怪我しなかったか、どうだった？」それを聞いてから、馬のことを問う「馬はどうだった」と聞いた。そういう解釈です。孔子も馬は心配です。馬は高価ですから。それで馬のことも後で聞いた。

このようにAとBとを並べますと、何かBのほうが人間的な感じがします。Aは立派な人という感じです。どっちが本当であったか、今となってはもうわかりません。

しかしBと解釈すると、孔子の持っている人間性が表れると思います。

『論語』には、わからない解釈、複数の解釈がある、そういった例を挙げました。

次に三番目の例です。

「<sup>しいわ</sup>子曰く、<sup>あした</sup>朝に<sup>みち</sup>道を<sup>き</sup>聞かば、<sup>ゆう</sup>夕べに<sup>し</sup>死すとも<sup>か</sup>可なり」(里仁第四)

私は第一回で紹介しました自著の『論語 全訳注』の執筆中、実はこの文の訳に苦しみました。

結局、本として刊行しましたときに、こうしました。

「この訳はできない。日本語訳がどうしてもできないから、原文、書き下し文だけで読んでほしい」ということを書いて出版しました。

但し、ある方の訳を紹介しました。それは<sup>いざわじろう</sup>五十沢二郎という方です。

※<sup>いざわじろう</sup>五十沢二郎さん本の画像

『論語』にはいろいろな優れた訳がありますが、私は、この方の訳が非常に優れていると昔から思っています。

この方は研究者でもなければ、この『論語』で特に有名だった方ではありません。経歴はよくわかりませんが、残されたものを読む限り、『論語』を非常にしっかりと読み込んだ方です。

そして『論語』全部を訳しているわけではありませんが、重要な文について、非常にいい訳をしています。

私は感心しております。

ですから、私の『論語 全訳注』にも、五十沢さんの訳を何度か参考までと挙げています。

私が訳せなかった『論語』のこの句を、五十沢さんはこう訳しています。

「真理に生きることを知れば、肉体の死の如きはもはや何物でもありはしない」

※『中国聖賢のことば』（講談社学術文庫）

これは「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」から、直接生まれたようには思いません。

五十沢さんが真剣に読み込まれた結果の訳文と思います。

『論語』を読んで読んで読み込んで、自分のことばで訳しておられると私は思います。

ただ単に現代語訳をするのではなく、『論語』を読み込んで、その気持ちのままに訳されたと思います。私は敬意を持っております。

今回は『論語』を読む楽しさ、第二回のお話でした。